

【活動報告】

日本資料専門家欧州協会 EAJRS 第 33 回年次大会基調講演 日本の「旧家」に眠る資料 —デジタル化の前に—

藪 田 貫

1 姫路とベルギー

KUルーヴェン大学で開催される第33回年次大会に、基調講演者として招いていただきありがとうございます。世界的なコロナ禍もあってベルギーには6年ぶりの訪問となりましたが、懐かしさがこみ上げてきています。今わたしは、世界遺産姫路城のすぐ傍に立地する兵庫県立歴史博物館の館長を勤めていますが、その姫路市がじつは、ベルギーと深い関りがあることを最初にお話します。どちらの人にも、あまり知られていないことだと思います。

今年2023年は姫路城の世界文化遺産登録30周年ということで、さまざまな記念行事が催されています。5月に開催された姫路城本丸広場での平成中村座による歌舞伎公演がその一つですが、わたしどもの歴史博物館でも、開館40周年記念事業として特別展HISTORY OF MUSEUMを開催しました。

当館は1983（昭和58年）年4月、5層6階地下1階の姫路城大天守の北側、国の特別史跡の一画に開館しました。基本設計は世界的な建築家丹下健三事務所によるもので、随所に、城郭を思わせるアイデアが施されています。姫路城天守閣の北側に立つ博物館として、姫路城とペアになる建造物とのアイデアが丹下にはあったと思われませんが、その中でも極めつけは、三列に並んだ棟の内、中央棟の先に白鷺（姫路城を別名白鷺城と称します）の頭よろしくキューブ体の空間を設け、そこにはハーフミラーが取り付けられているのです。



図1

内部のレストランからは現実の大天守がガラス越しに見え、外部の公園からは鏡に映った大天守が見える、という設計です。公園内の敷石で指定された場所に立てば、鏡に映った大天守とともに自分たちの姿を写真に収めることができるのですから驚きです（図1）。

それほどに白亜の大天守は、特別史跡姫路城跡の中でも際立った存在です。東西南北すべての場所から仰ぎ見る存在ですが、その東隣にカトリック教会、さらにその南北にはカトリック系の学校（中高一貫制）が二つ、あります。男子校の淳心学院と女子校の賢明女学院です。お城とカトリックの学校という組み合わせは、一体、どうして生まれたのでしょうか？

博物館蔵の資料—高橋秀吉コレクションの一枚の地図が、その起点を教えてください（図2）。1947年（昭和22年）頃の「姫路復興地図」と題するもので、カトリック教会と賢明女学院の建物が見え、北側の国立姫路病院との間には広い空白があります。のちに淳心学院が立つ場所で、実際に1974（昭和49）年の写真ではそれらがすべて揃い、復興計画通りに進んだことが示されています。



図2

その復興計画はGHQ、連合軍最高司令官総司令部の統治下に立てられました。当時姫路にはモラート中佐以下5000人の軍隊が駐留し、町村合併などを進め、姫路市の戦後復興に大きな足跡を残しました^(註1)。

その一つとして姫路城の東部一帯が、カトリック教布教の場として提供されたのです。

そこで活躍したカトリック教団には、つぎの三つ団体があります。

① カトリック淳心会CICM

Congregatio Immaculati Cordis Marie

1862年、ベルビースト神父によってベルギーのスクート村で創設され、1948年、大阪大司教の要請で来日した。

② 聖母奉献修道会

The Canadian Sisters of the Presentation

1796年、修道女アンヌ・マリー・リヴィエによって創設され、1948年、カナダ管区から来日し、1950年、本町に土地を購入して賢明女学院を設立した。

③ 聖フランシスコ病院修道会

The Hospital Sisters of St. Francis

1812年フランシスコ会クリストフ・ベルンスマイヤー神父によって始められ、44年修道女を迎え、姫路の北部に進出し、医療活動を進め、本部は現在、聖母マリア病院内にある。

この内、布教の中心となったのはカトリック淳心会CICMで、聖母奉献修道会と共同で姫路城東部の元日本軍第10師団司令部教区（7900坪）を購入し、淳心・賢明の両学校を創設したのです。その途中の姿が、1947頃の「姫路復興地図」に描かれているのです。師団司令部の建物はCICMの司祭館として再生され、今も残されています^(図3)。



図3

二年後の1949年には、フランシスコ・ザビエルの「奇跡の右腕」（聖遺物）が400年ぶりに日本に戻るといふ一大イベントがありました。それを記念して6月、姫路カトリック教会で、ヨゼフ・スパー

司祭の下でミサが挙げられました。それに因んで建てられたザビエル堂が現存します。こうして姫路は、カトリックの世界に広く知られることとなったのですが、とりわけベルギーからは、1964年6月、ボードゥアン国王夫妻が姫路を訪れ、淳心・賢明両学校を視察しています。

翌1965（昭和40）年7月、姫路とベルギーの交流はシャルルロア市と姫路市の姉妹都市協定に発展し、さらに1983年、姫路市庁舎として使われていた日本軍第88連隊倉庫は、ポール・デルフォールからベルギー画家のコレクションを収蔵する美術館に生まれ変わりました。

以上が、姫路城の傍で戦後30年の間に起きた変化の概要ですが、わたしたちにとって印象深いのは、こうした変化を指導したカトリック淳心会CICMスパー神父Josef Spaeの存在です^(図4)。



図4

1948年5月12日付『神戸新聞』には、つぎのように紹介されています。

スパー神父は文学・哲学の両博士、日本語をはじめ四カ国語をスラスラ話すことができ、かつて京都大学で教鞭をとったこともあって、従来、日本文化方面に活躍するに最も適当な人と期待されている。

彼はベルギー人で、当時38歳。1938（昭和13）年に京都大学に留学して江戸時代の儒学者伊藤仁斎について研究、その成果で、アメリカのコロンビア大学から博士号を与えられています。戦後姫路の復興の陰には、一人の日本学者の存在があったのです^(註2)。

こうして戦前、世界に広がった日本学は、戦後を経て、現在に繋がっているのです。

2 海外の日本研究との出会い

さて、こうして海外に展開した日本研究にとって、1987年に設立された国際日本文化研究センター（略称日文研）の存在は大きなものがあります。海外の日本学者にとって、開かれた窓口—知縁の有無に関係なく、目指すべき研究施設が出来たのですから。

一方、日本人についてはどうでしょうか。正直、わたしにとって日文研は、これまでなんの意味もありません。なぜなら、自力で海外の日本研究の場に行くしかなかったからです。

わたしは1980（昭和55）年の8月、ルーマニアのブカレストで開かれた国際歴史学会に、先輩研究者に誘われて参加しました。当時32歳、日本研究者としての胸躍る旅立ちでした。開会式に出ると、大統領官邸のバルコニーにチャウシェスク大統領の姿が見え、参加者に大きく手を振っていました。1989年のビロード革命以前のことですが、記憶に残っているのはそれだけで、翌日からは南下してギリシア・トルコに向かう研修旅行が用意されていました。それ自体は素晴らしい体験でしたが、当初の目的である会議に出た記憶がほぼないのです。したがって消化不良も甚だしいもので、当然、満たされない思いは残り、積もり積もっていきました。

再度の挑戦は、1997年に巡ってきました。今度は単身、ハンガリーのブダペストで開かれたヨーロッパ日本研究協会EAJSに参加し、連日、英語での発表の場に身を置きました。容易に分かるはずはなく、報告の内容を要約することはできませんが、最終日のシンポジウムに招かれたアメリカアジア学会AAS会長キャロル・グラッグCarol Gluckの講演は明瞭に記憶しています。そこで彼女は、「アメリカの日本研究は、デパートのように何でもある」と語ったのです。戦後約50年にして、アメリカの日本研究がいかに大きな達成をなしたか—それを彼女は言いたかったのでしょうか、その一面は、1999（平成11）～2000年の初めてのアメリカ滞在で知ることとなります（註3）。

ブダペストで再起する上で大きな糧となった経験が、1995（平成7）年にありました。阪神淡路大震災のあった年の9月、所属する関西大学の交換留学制度を利用して、KULレーヴェン大学に滞在する機会を得たのです。そこでERJRS現会長のファンデバレ先生Willy Vande Walleに出会い、欧州の日本研究者との交流機会が生まれたのです（図5）。



図5

この機会はその後、1999から2001年の共同研究「19世紀の日本とベルギー」（科学研究費）を生み出し、学会の場以外に共同研究の場でも交流することができると知りました。

こうした複数の経験は2007年、文部科学省の支援を受けた関西大学EU-日本学教育研究プログラムの採択に結実しました。日本を研究対象とする日欧両地域の大学院生を交流させるという計画で、関西大学のパートナーとしてKULレーヴェン（ベルギー）、チューリッヒ大学（スイス）、デュッセルドルフ大学（ドイツ）が参加しました（のちにチェコのカレル大学も参加）。

メインのプログラムは院生の研究発表で、日本語か英語、どちらかでの発表という基準がありました。始めてみて交流の効果を感じたことから次に、大学院後期課程の学生には学位取得のために海外での研究発表を経験することが重要ではないか、と考えました。そこで思い付いたのが、この場、EAJSの年次大会です。EAJSもありますが、3年一度の開催、そして参加規模が大きい、という二つの難点がありました。そこにファンデバレ氏が会長をしているという親密感も加わり、2008年のリスボン以降、ほぼ連年、大学院生を連れて参加しました。



図6

その成果は文句なしに大きかったと言えます。といってもわたしにとっては、会期中に行われる各都市での資料閲覧の場が一番の魅力でした。と

くにポルトガルのエボラで屏風の裏から出たキリシタン文書の写真を見た後、実物に出会えた時の興奮は忘れられません(図6)。

以上が、戦後すぐに生まれ、海外の日本研究者との出会いを求めて彷徨したわたしの日本学国際交流の概要です。一つの実践例としてお聞きください。

さて、本日のテーマ「日本の「旧家」に眠る資料—デジタル化の前に—」は後述のように、日本でのわたしの調査研究歴が背景になっていますが、海外での経験も一部、あります。それを示すのは、ロンドン大学SOASの日本研究センターが2015年7月に企画した国際シンポジウムShifting Perspectives on Media and Materials in Early Modern Japanでの発表でした。当日、ケンブリッジ大学のコールニツキー氏Peter Kornickiと二人、基調講演をしましたが、わたしの講演は「交流する日本近世史—美術と歴史・絵画と史料」と題するものでした。

じつは海外での日本研究行脚を通じてわたし自身、みずからの研究課題の特性を知ることになっていました。それは、日本の学界にのみ席を置いていれば分からない気付きでした。たとえばAASの場でいえば近世女性史について話す機会がもっとも多く、それは2000年2月にハーバード大学ライシャワー日本研究所でおこなった講演Rediscovering Women in Tokugawa WorldがOccasional Paperとして公表されたことに起因します。「日本研究ならなんでもある」国アメリカならではの寛容さの現れです。

一方ヨーロッパでは、とくにEAJRSでは日本美術史について報告を聴く機会が多く、自然と耳が肥えてきたのです。その結果、本来、わたしの専攻分野である近世日本の社会史と経済史・地域史のすぐ隣に、美術史があることに気が付いたので。日本では美術史と社会史・経済史などの学界はすべて縦割りで、文化史はまだしも、美術史の報告を聞く機会はほぼありません。その壁をEAJRSが破ってくれたと言えるでしょう。そこで、求めに応じて考え出したのが「交流する日本近世史—美術と歴史・絵画と史料」と題する講演でした。

3 地方の旧家に眠る史料・資料

3-1 政事・文事・家事

いよいよ本題に入りますが、今日の講演には一つ、大きな前提があります。日本研究の世界的な広がりが、インターネット環境によって加速され

ていることです。その結果、今年の大会テーマ「日本研究の時流に適應する」Adapting to Changing Trends in Japanese Studiesが設定されていると考えます。

海外からネットを使ってアクセスされる日本関係資料は、第1に主に活字と画像からなる文献データ、第2に博物館・図書館・文書館・資料館などに所蔵される記録や古文書の類です。前者の場合、すでに編著者によってデータは捉え直されており、オリジナルでないことは自明です。後者の場合はどうかと言えば、これもまた収蔵された館それぞれの約束事によって整理されたもので、いわば「新秩序」の下にある資料です。

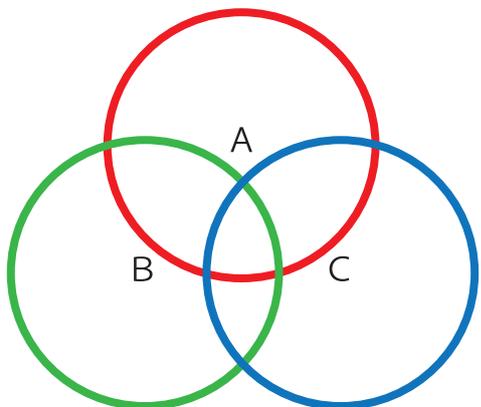
したがって、そこではもはや資料がある個人宅に、どういう風を集積し、伝来され、所蔵されていたか、すなわち「旧秩序」を知る手掛かりはありません。加えて、新秩序から旧(原)秩序に至る途は塞がれています。それは海外のみならず日本でも同様ともいえますが、日本国内であれば、しばしば旧秩序に接近することが可能です。なぜなら農工商の身分として都市と農村に住んだ「旧家」と呼ばれる家々が、日本の各地に残っているからです。そこには16世紀以降19世紀に至る歴史的な、そして地域的な経験が、さまざまな資料・文化財として——最近では「地域歴史遺産」という用語も生まれている——遺されています(註4)。

旧家はまず、建造物そのものが文化財として注目されますが、「蔵のとびら」が開かれることで同時に、あるいは遅れて、家蔵の美術品・図書古典籍・歴史史料・什器・道具といった資料の調査が進みます。そうした機会を、日本の研究者に広く提供したのは、府県から市町村に至る自治体のレベルで進む歴史書の編さん、つまり「自治体史編さん」事業の展開です。

それは戦後歴史学の発展の基礎をなすもので、多くの日本史研究者・文化財関係者が参画し、今日に至っています。わたしもその一人で、その実践を経て、歴史学上の諸問題をその都度、論じてきました。それがわたし個人の研究履歴となっています。

しかしネット環境の加速とアナログ世界の激変下にあって、また研究者人生の終盤に当たり、これまでの個々の実践を、全体として総括する必要があります。この度の基調講演の誘いは、その最大のチャンスと考えました。幸い、日本国内でも、論文として書く機会を与えてもらいましたので、そこで論じたことを要約しながらお伝えしたいと思います(註5)。

テーマは、「旧家の世界とは何か」。あらかじめ仮説的に提示するならば、下図のようにA政事、B文事、C家事という三つの分野の重なりとてあります。



しかし実際には、研究上の課題に合わせて公開され、利用されることで、分割されることとなりました。さらに外部からの視線（たとえば骨董品の価値）と、内部での選択（たとえば遺産相続）によって、その分割が進んでいったのです。

ここで少し、わたしがこれまで実際に調査に入った旧家を例に挙げて説明してみましょう。

① 吉村家（大阪府羽曳野市）写真a

民家として戦前には国宝、戦後に重要文化財として指定された家で、建築史家の伊藤忠太が「古くてモダンな家」と評したことで知られています。豊臣期にすでに存在し、1591年（天正19）の文書に「政所」と記されています。その後も大庄屋を歴任し、地域の〈政事〉に深く関与した家ですが、当主はまた文人として1823（文政6）年の紳士録『浪華郷友録』に載せられています（註6）。

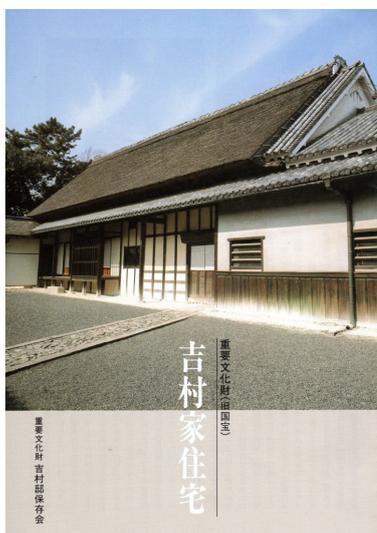


写真 a

② 川本家（鳥取県琴浦町）写真b

近年、鳥取県立博物館を介して訪問する機会を得た旧家で、その時、奥の蔵で家蔵古文書の目録作業が行われていました。なによりもこの奥座敷が、同家の〈文事〉を雄弁に語っています。床の間・掛軸といい、襖・障子・欄間・扁額といい、この空間を、一年を通して利用するにはどれだけの知恵と什器・書画が必要か、訴えてくるものがあります。「百聞は一見に如かず」を地で行く例です。



写真 b

③ 平尾家（兵庫県猪名川町）写真c

兵庫県立歴史博物館として調査する機会があった旧家ですが、山間部の一面に茅葺屋根を囲んでL字形に堀が巡り、満々と水を湛えた池に主屋が映る景観には圧倒されました。同家には戦国時代の感状（武勲を褒めた書状）が巻物として大事に残されていますが、多田院御家人の由緒を持ち、約40代と家系を伝えることで、〈家事〉の重要性を想像するに最適な家です（註7）。



写真 c

こうしてそれぞれの旧家にはそれぞれ個性があり、アクセントがあります。それに応じて、研究上の視点も異なってきます。しかし本来、〈政事〉〈文事〉〈家事〉は一体で、重なりとしてあったとわたしは考えています。

A 政事 Political Mattersとは村の庄屋や町年

寄、十人両替・札差・御用町人といった当時の政治権力との間でもつ関係性をいい、近世日本の政治体制に規制された枠組みです。おもに村落史や地域史の分野で活用され、分厚い研究蓄積があります。

B 文事Cultural Mattersとは、能や謡・茶事・書画・医事といった文化の諸分野での実践を指し、都市のみならず地方にも文人が多数、出現した状況を念頭に置けば、容易に理解されるでしょう。博物館・美術館に資料が収蔵されているケースがもっとも多く、美術史や文化史の分野として知られています。

C 家事Household Mattersには、家屋という構造物と、家族・親族という人間集団、そして家系・家譜などが含まれ、旧家のもっとも基底的な部分です。家屋というハードは建築史、家族・家系というソフトの分野は家族史・女性史・ジェンダー史の対象にもなっています。

3-2 〈政事〉と〈文事〉・〈文事〉と〈家事〉

幕藩体制という政治体制の下では、旧家の多くは地域の政治の拠点として、庄屋や大庄屋・町年寄などとして存在していました。しかしその期待に応じて〈政事〉を全うするには、家事が整い、当主に統治能力がなければなりません。その能力を後世のわたしたちが確認できるのは、そこに所蔵された民政関係のさまざまな史料です。それは第一に文字資料であることから、〈文事〉が前提としてあります。その文事をどうして獲得したかは、なかなか判然としないのですが、一つの有力な事例があります。

大阪府下南河内の在郷町大ケ塚（河南町）の旧家、河内屋の当主可正（壺井氏）が1680年代に記した旧記です。豊臣期の天下統一戦争に敗れ、帰農した家筋の可正はみずから「世は太平也、身は百姓也」として、「手カク事男ノ第一ノ芸ナリ」と主張します。それは所謂、読み書き能力の獲得ですが、さらに進んで「農商ノ輩モ、己ガ渡世ノ業ヲヨク勤メテ後、諸芸ヲ好ミ」と、茶事・俳諧・儒学などを学び、楽しむことを推奨します。家事の「余力」で文・芸を楽しむことから、「余力学文」として総括されます。

こうして「徳川の平和」の下、日本の各地で、〈文事〉が蓄積されて行きます。近年、「地方文人」として各地で、その存在が明らかにされています（註8）。

その結果、地方の〈文事〉の中から、政治の中心・江戸の目に留まるものが生まれます。今

年2023年春、国立歴史民俗博物館の企画展「いにしえが、好きー近世好古図録の文化誌」で取り上げられた神戸住吉（神戸市東灘区住吉）の豪商吉田喜平次三代のコレクション『聆涛閣集古帖』がそれです（註9）。

なかでもコレクションを始めた17代道可（諱敬、1734～1802）は、京都の文人橘泰の随筆「筆のすさび」に「定信より送られた阿武隈川の埋もれ木の文台を所持している」と紹介され、『集古十種』の編者との交流が認められます。実際、定信の領地白川藩の家中との遣り取りした書状が吉田家資料によって確認されています。

喜平次みずから「おのれ壮年より学友、茶事を好む」と語るように、家業である酒造業の成果を元に、「余力学文」の道を極めており、その精華が『聆涛閣集古帖』なのです。

ただこうした〈文事〉が、〈政事〉と無関係ではないことに留意すべきです。戦前、吉田家の許を離れた『聆涛閣集古帖』とは別に、「吉田家資料」が残されました。それが近年、地元の住吉資料館の手で整理され、内田雅夫『神戸住吉の豪商吉田家』として紹介されています。それによると聆涛閣は、店のある本宅を離れ、住吉浜に立てられた（波の音が聞こえる）文庫で、餐霞園という庭園が併設されていました。

ところがこの文人の顔とは別に、彼は住吉村の有力者として天明年間（1781～89）の飢饉に際して救済活動に尽力したことで、幕府代官岸本武太夫から「吉田喜平次」という名を貰っているのです。墓誌に「人となり篤実温恵、古きを好み、賢を慕う」とある通り、〈政事〉と〈文事〉とは一体であったのです（図7）。



図7

さらに彼は、〈家事〉においても中興の役割を果たしています。その出自を尋ね、「其先出於南朝吉田内大臣定房子孫」（墓誌）であることを確定し、死の前年1801（享和元）年、「定房の三男道澗大居士等を吉田家の始祖とする」文書を書き残しています。類まれな〈文事〉は、〈政事〉とともに〈家事〉にも向かっていたのですが、豪商・酒造家としての詳細が不明なのが惜しまれます。

もうひとり取り上げたい文人がいます。泉佐野湊浦（大阪府泉佐野市）の豪商新屋の3代目当主里井浮丘（新屋治右衛門、1799～1866）で、〈文事〉と〈家事〉の関りを考える上で最適な人物です（図8）。



図8

彼も〈文事〉の成果を数々の記録として残していますが、自分のキャリアを振り返って「家のなりはひ（家事）をするがうへに、里正のこと（政事）さへうけたまわりて、よの中のわざ、家のこと（家事）はた多ければ、学ぶべき志（文事）はありて其のいとま（暇）なんなかりける」（1822/文政5年、24歳）と記しています。家業とともに、庄屋としての〈政事〉に忙殺され、学ぶ意思があっても〈文事〉に費やす時間がなかった、というのです。17世紀前半の可正が言う「余力学文」が、19世紀に入っても健在であることが分かります。

そんな浮丘、37歳になると「行余楽記」という記録を付け始めます。「余力学文」から「行余楽記」へと、〈文事〉がより積極的に位置付けられているのが分かります。〈文事〉の萌芽から〈文事〉の成熟へと捉えることができるでしょうが、その浮丘にとって「楽」とはなにか？

それは、39歳の天保13年（1842）に作成した「挾芳園所蔵書画展覧例」によって明らかとなります。挾芳園は別荘の名で、家蔵の書画をそこで公開するに当たって作られた内規が「展覧例」なのです。家業と公務に忙しい5月～7月と11月～2月は除くということで、あくまで「行余」が前提であるとの精神が貫かれています。それでも京都・大坂をはじめ各地から文人たちが、浮丘の所蔵する書画

の閲覧を目的に遠く、泉佐野までやってくるのです（図9）。

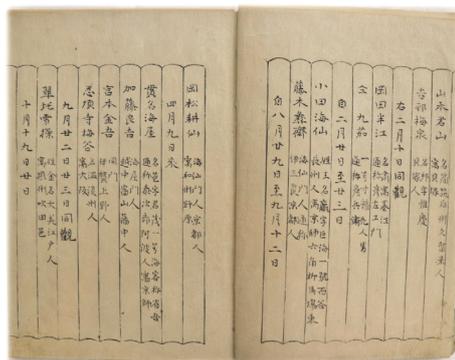


図9

それほどに彼の書画コレクションは注目されていたのですが、その訳は、中国書画の秘蔵にあります。1842（天保13）年3月、大坂の画家岡田半江（1782～1846、米穀商岡田彦左衛門）が浮丘に宛てた手紙からは、半江が明代の画家周之夔と李邃の作品を借覧していたことが分かります。さらに1844（天保15）年には、中林竹洞（1776～1853）宅で浦上春琴（1779～1846）らが周之夔作「溪澗松濤図」を熟覧していることが、泉屋博古館現蔵の箱書から分かっています（板倉聖哲『典雅と奇想—明末清初の中国絵画』2017）。

この記述は、浮丘の日記『日省簿』の9月21日条から裏付けられるに至っていますが、1848（嘉永元）年4月には、自分の生誕五〇年を祝うべく京都祇園清井楼にて秘蔵書画八種を特別開陳し、さらに木屋町の竹洞宅で古書画を展覧したことで、貫名海屋（1778～1863）や梁川星巖（1789～1858）といった錚々たる人士が参観しているのです（註10）。

こうして里井浮丘は単なる地方の文人の一人としてでなく、藍瑛・徐霖・周之夔などの中国書画のコレクターとして令名が高かったことが判明しました。

それでも謎は残ります。彼がこうした書画をいつ、どこから、いくらで入手したかという点です。そこで注目されるの〈家事〉の記録です。幸いに里井家には『泉州日根郡里井家記録』という史料（1807～71の記録、歴史館いずみさの所蔵）が残され、新屋里井家の干鯛・米穀・綿・砂糖などの商い、幕府や近隣諸藩との関係、近隣の社寺への信仰、飢饉などの気象変動と物価の高下などが浮かびあがるとともに、家族の動向が窺えます。

とくに1822（文政5）年8月、父の死後、病弱の兄に分割相続した上で、弟栄助が家督を継ぎ、治右衛門（浮丘本人）と改名した経緯は注目されま

す。その際、新当主である彼には「^{たなおろし}店卸帳」と「田畑帳」が引き継がれ、家政の継承が見て取れます。そこには「屏風掛物書画の類并腰のものなどは別紙」と注記され、相当数の書画があったことがわかります。それを元に彼は、「挟芳園所蔵書画展観例」を作ったのです。「先世の遺物、近日に及び得る所の書画」と記す通りです。

ただし、そこには具体的な作品名が記されていません。ところが新当主となって彼が引き継いだ「店卸帳」に、さきほどの書画が出てくるのです。それは1832（天保3年）の項で、資産を書き出した上で、支出の項に世帯帳高8貫目と並んでつぎのようにあります。

一 六貫目 大坂安治川鹿島屋亀右衛門殿にて
書画かけ物六十二口かい代 辛卯之此帳面奥
ニ相記ス

辛卯は1831（天保二）年のことで、別項目として鹿島屋から買った「和漢新古書画掛物」62口と65幅の目録が記されています（図10）。

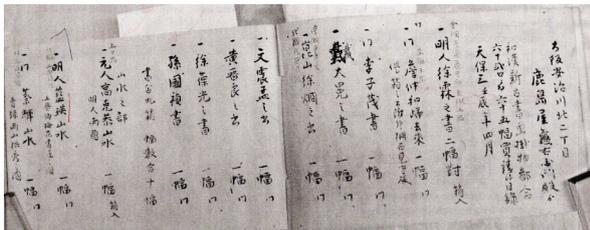


図 10

そこに明人徐霖（1462～1538）の書、明人藍瑛山水、周之夔山水などが並んでいます。山水とあるだけで画題を欠いていますが、箱書によって周之夔の作は、「溪澗松濤図」（1646年作）と分かっています。さらに、藍瑛（1585～1664？）の山水がもし「秋景山水図」ならば、現在、静嘉堂文庫美術館に所蔵され、重要文化財に指定されている作品に相当します（『明清の絵画と書跡展』静嘉堂文庫美術館、2005）。

「旧家の世界」から〈政事〉のみ研究することも、〈文事〉を切り取って展示することも可能です。しかしそれは〈家事〉を含めた全体を、一つの視点で分割したにすぎません。その結果、とくに〈家事〉が軽視されていることには留意しなければなりません（註11）。

これからは三つの視点での協同作業が進むことで、新しい世界が切り拓かれるとわたしは信じています。そこに垣根はありません。デジタル化の進展は、国際的規模での協同作業を可能にし、そ

の成果が世界に発信されることを保障します。それを願ってしまえば、「旧家の世界」と付き合いたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

【注】

- (1) 『姫路百年』姫路市、1991年。『聞き書き・姫路の戦後史』戦後姫路地図を作る会、1995年。
- (2) 藪田「地方都市姫路における日本・ベルギー交流史」関西大学日本・EU研究センター、『関西大学日本・EU研究センター報』6、2018。執筆に当たっては、淳心学院・賢明女子学院・姫路聖マリア病院・姫路カトリック教会の教職員ならびに聖職者の方々に、資料を提供していただくとともに取材にも応じていただいた。この場を借りてあらためて謝意を表します。
- (3) 藪田「管見：アメリカの日本史研究」『日本近世史の可能性』校倉書房、2005。
- (4) この背景には、1995年の阪神淡路大震災を契機に始まった歴史資料ネットワークの全国的な活動、ならびに2023年に創設された神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの活動がある。詳細については同センター編『「地域歴史遺産」の可能性』岩田書院、2013、および20年の歩みを総括した大國正美「歴史文化をめぐる地域連携協議会の成果と課題」『LINK【地域・大学・文化】』14、2022を参考。
- (5) 藪田「旧家の世界—「政事」・「家事」・「文事」—」大阪歴史学会『ヒストリア』300、2023。
- (6) 藪田「古くてモダンな家」『大阪遺産』清文堂出版、2020。
- (7) 文化庁の企画した「地域と共働した美術館・博物館創造活動支援事業」として兵庫県歴史文化遺産活用活性化実行委員会の下、2015（平成26）年から「川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究」を三ヶ年にわたって実施し、2018年に報告書を刊行して終えた。
- (8) 代表的な成果としてこの分野の先駆者高橋敏の『地方文人の世界』同成社、2011を挙げることできる。さきに『民衆と豪農』未来社、1985年を著わしていた高橋が1995年、三島市の佐野美術館で開催された特別展「東海の名園に遊ぶ 植松家と文人墨客」を見た後、沼津市史編さんに従事するなかでコレクターの植松家所蔵資料に取り組むことで生まれた成果である。「豪農」から「文人」へ一直線に繋がっていることが分かる。
- (9) 『いにしえが、好き—近世好古図録の文化誌』国立歴史民俗博物館、2023。なお内田雅夫『神戸住

吉の豪商吉田家』住吉資料館、2022と合わせて利用することが求められる。

(10) 富田博之「周之夔筆『溪澗松濤図』をめぐる人々」『泉屋博古館紀要』36、2020。

(11) 『里井浮丘遺稿抄』（泉佐野市教育委員会）が発行されたのは1966（昭和41）年のことで、それによって稀代の文人であった浮丘の存在は明らかになりました。しかし彼が関わった〈政事〉と〈家事〉は不明で、その後の「新修泉佐野市史」編纂の過程でも十分、明らかにされていない。その作業にはわたしも関与していただけに、自己批判は避けられない。

なお史料利用に当っては、泉佐野市文化財保護課東原和代氏のご協力を得た。記して謝意を表したい。

（付記）

本稿は、EAJRS日本資料専門家欧州協会第33回年次大会（会期9月13日～16日）の初日、基調講演として報告したものである。当日は、パワーポイントで画像を示しながら日本語で報告した。その反響は予想以上に大きく、後日、読み返したいとの希望が寄せられたので、文章化して記録に残すこととした。その際、あらたに注を補った。

なお事前に要旨を求められたので日本語と英語で作成し、同協会のホームページに掲載された。参考に、その英文を末尾に添付する。原題には「デジタル化の前に」は入っていないが、プログラムで諸報告の要旨を見ることで、報告の目的をより明らかにするために現地で付け加えた。

英訳に当たっては日本美術史を専攻するライデン大学教授ドリーン・ミュラー Doreen Muller 氏の協力を得たことを明記し、感謝の意を表す。

2024年1月7日記。

Materials from Old Houses in Japan: Politics, Culture, and Household Matters (Draft)

With the expansion of the digital humanities, the field of Japanese Studies is progressing on a global scale. Within this environment, researchers wishing to access archival materials from abroad will first and foremost make use of digitized texts that have been transcribed and imaged, followed by historical records housed in museums, archives, and research libraries. However, transcribed texts have been edited and are therefore no longer original. In addition, museums, archives, and research libraries organize materials according to their respective cataloguing requirements. This is because public institutions receiving donations of archival materials have to make these materials available to the public. The materials are thus subjected to a 'New (Archival) Order'.

As a result, there is no way of knowing who originally compiled these materials and how they were handed down and held in private homes, thereby obscuring the 'Old (Archival) Order' and irretrievably separating it from the 'New (Archival) Order'.

However, it is often possible to access the 'Old (Archival) Order' in Japan, mainly because of the surviving houses of old families who were of peasant, craftsmen, or merchant stock and who lived in towns and villages. In these houses, historical and local experiences from the sixteenth through the nineteenth centuries have been stored in the form of diverse materials and cultural assets. These have recently been coined 'historical-and-cultural-heritage'. Initially, the architectural structure of these old houses tends to draw the attention of researchers as a cultural asset in its own right. At the same time, and sometimes with delay, research is conducted into the materials including artworks, old books, historical documents, furniture, and tools that make up the household possessions. At that moment, the key to the storehouse is unlocked.

Opportunities to research materials kept in old houses throughout Japan are mainly available to researchers living in Japan, giving them an advantage over researchers based abroad. At the same time, these opportunities rest on the advancement of the efforts of local governments, including prefectures, cities, towns, and villages, in compiling local histories, so-called 'Municipal History Compilations'. These compilations are rooted in trends in historical research in the postwar period, drawing contributions from historians and those

involved with cultural properties, and continuing to the present day. I am one of these historians, and I have discussed various problems of historical research in the context of these projects. Now approaching the end of my research career, and considering the radical changes driven by the advancement of the digital humanities, I feel the need to reflect upon my past research, particularly regarding the question of understanding the 'world of the old houses'.

This is the subject of this report, and it is hypothetically presented as an overlap of three fields: a. Politics, b. Culture and c. Household Matters.

A 'Politics' addresses the relationships that village headmen, town elders, money exchangers, rice brokers, elite merchants and others had with the political powers of the time. These relations were embedded in the political system of early modern Japan, and they have been the subject of extensive research in the fields of village history and regional political history.

B 'Culture' includes diverse cultural practices such as Noh chanting, the tea ceremony, calligraphy, painting, and medical practice. This diversity was driven by the spread of literati not only in the cities but also in the countryside. Items in the 'culture' section are usually housed in museums and in art galleries, and they have been the subject of research in the fields of art history and more recently book history.

C. 'Household matters' include the structure of the house, family relations, family lineages and genealogy. A particular focus has been on studying wealthy peasant-merchant houses and notable families in historical research, as well as in the fields of women's history and gender studies.

Although these three fields have become staples for conducting research in Japanese Studies, the biggest remaining problem is the fact that the interrelationships among A. 'Politics', B. 'Culture' and C. 'Household matters' have been neglected thus far. By addressing these specifically below, I will present the 'world of the old houses' through the lens of the interrelationships among these three fields.